

# 3歳児の幼稚園における絵本とのかかわりと家庭での絵本体験との関連

－入園直後の1学期間の絵本とのかかわりの分析から－

横山真貴子

(奈良教育大学 幼児教育教室)

3-year-old Children's Picture-book Experiences both in a Kindergarten and at Home.  
:From Analysis of Children's Picture-book Experiences in the first term.

Makiko YOKOYAMA

(Department of Early Childhood Education, Nara University of Education)

**要旨：**幼稚園の3歳新入園児を対象に、入園直後の1学期間において園で幼児が自ら絵本とかわる行動と家庭での絵本体験との関連を検討した。園での幼児の絵本とのかかわりは自然観察法を用い、家庭での絵本体験については母親に質問紙調査を行った。両者の結果から、入園間もない幼児の園と家庭での絵本とのかかわりの実態を明らかにした。主な結果は、以下の3点にまとめられた。①保育者は1学期の絵本環境を家庭との連続、安心できる空間として設定していた。実際に幼児が絵本とかわる行動も、活動と活動の合間の一息つくような時間帯に多く見られた。②幼児の絵本とのかかわり方には「ひとりで絵本を読む」といった行動だけではなく、「離れた場所から絵本を見る」「絵本を読む友だちを見る」といった間接的なかわりも見られた。④園で絵本とかわる頻度が高い幼児には、家庭での経験が豊かな子どもと少ない子どもの両方が含まれた。

**キー・ワード：**絵本 picture-books, 3歳児 3-year-old children, 保育実践 daily practice in kindergarten

## 1. 問題

2000年の「子ども読書年」以来、日本における絵本をめぐる状況は大きく変化した。例えば、乳幼児健診の機会に全ての赤ちゃんに絵本を手渡す「ブックスタート」運動<sup>1)</sup>の広がりはめざましい。この運動は、赤ちゃんと保護者が絵本を介して向き合い、「あたたかくて楽しいことばのひととき」を持つことを応援するものであるが、2005年10月31日現在、630の市区町村で実施されている(全国の市区町村数は2214)。この広がりは、2004年の時点で全国で生まれてくる赤ちゃんの5人に1人がブックスタートパックを受け取っている計算になる(秋田, 2004)ほどである。絵本を受け取るだけではなく、実際に4ヶ月の赤ちゃんの6割近くがすでに読み聞かせを体験しているという調査結果もある(横山・秋田, 2002)。また、出版科学研究所(2005)によると、2004年度に国内で出版された新刊絵本の数は1931冊にのぼる。「あふれる絵本と早まる出会い」、現在の子どもの絵本との関係は、このように表現できるだろう。

一方、絵本をめぐる心理学的研究においても、乳幼

児期早期に特に着目し、読み聞かせ体験と言語発達の関連について、新しい概念枠組みを創出しようとする動きがある(Fletcher & Resse, 2005)。

このように、絵本は乳児期の非常に早い時期から、子どもたちの生活の中に存在し、今、まさに脚光を浴びている。

ところで、従来、子どもと絵本のかかわりに関しては、児童文学や心理学、保育学の領域などにおいて、多くの研究が蓄積されている。しかし、横山(2004a)が指摘するように、いずれの研究領域においても、家庭と保育の場での絵本体験は、それぞれが別個に取り上げられてきた。その時々話題となる子どもの発達の姿を取り上げる学術雑誌『発達』は、昨年(99号, 2004)、「子どもと絵本の出会い」という特集を組んでいる。しかし、やはりそこでも、保育園(寺田, 2004)と幼稚園(井上・名倉・渥美, 2004)は、家庭(横山, 2004b)と別々に取り上げられている。1人ひとりの子どもに着目すれば、保育の場での絵本とのかかわりと家庭における絵本体験の双方を関連づけて捉えることは必須である。なぜなら、子どもは両方の場を生活の場として行き来し、日々発達していくものだからで

ある。幼児の絵本体験は、家庭と園での経験が双方関連し、影響し合って紡ぎだされていく（横山，2004a）のである。

そこで本研究では、家庭での絵本体験と園での絵本とのかかわりの双方を見ていく。先に述べたように、現在、絵本をめぐる状況は大きく動いている。こうした中で、実際に幼児はどのように絵本とかわっているのか、その実態を幼児が生きる2つの生活の場から明らかにすることが本研究の第1の目的である。

具体的には、一斉に保育経験を開始する幼稚園の3歳新入園児を対象に、入園直後の1学期間に焦点をあて、初めての幼稚園生活の中で、どのように絵本とかわるのか、その実態を明らかにしていく。絵本とのかかわりに関しては、保育者の働きかけによるものではなく、幼児自身が自発的に絵本にかかわる行動に着目する。なぜなら、幼児教育においては幼児の主体性を重視する。そこで、まずは幼児自らが絵本とかわる行動を選び取る場面を検討していくこととする。

さらに本研究では、家庭と保育の場での絵本とのかかわりの実態を明らかにすることによって、絵本をめぐる新しい状況下での保育における絵本の意義を、今、改めて問い直す契機としたい。

現行の「幼稚園教育要領」（1998）を見ると、絵本についての記述は、「言葉」の領域に3箇所見られる<sup>2)</sup>。そこには、絵本に親しむことによって、想像する楽しさを味わったり、イメージや言葉に対する感覚を養う、保育者や友だちと心を通わせることが、ねらいや内容として述べられている。絵本の想像世界を保育者や友だちと共有しながら、イメージや言葉の感覚をはぐくむことが期待されているといえる。

しかし、保育における絵本の意義は、これだけであろうか。最近の絵本研究では、「想像・イメージ・言葉」といった知的な頭の中でのみ展開するような絵本とのかかわりだけではなく、絵本とかわる身体性に着目した研究（秋田・横山・森田・菅井，2004）が進められている。すなわち、読み手と聞き手の姿勢や身体ふれあい、あるいはページをめくることや指さしなど、絵本とかわる身体が注目されているのである。

そこで、本研究ではこうした側面にも着目し、実際の保育現場の観察及び保育者へのインタビューを通して、保育における絵本の意義を問い直す第一歩とする。その基礎的データを得ることが本研究の第2の目的である。

## 2. 方法

### 2.1. 対象

N県内の3歳保育を実施しているN幼稚園3歳児1クラス24人（男女各12人）とその母親、及びクラス担任の保育者2人（主担当の教諭、及び副担当の講師）

である。

### 2.2. 調査時期と手続き

#### 2.2.1. 園で幼児が絵本とかわる行動：観察

期間は2003年5月～7月の1学期終了時まで。原則として週1回、同じ曜日（木曜）に、登園から降園まで、約2時間半、計11回の観察を行った。観察の記録は、フィールドノートを主体とし、ビデオを補助的に使用した。観察者の立場は、幼児からの働きかけがあれば応答するが、積極的な関与は避ける「消極的な参加者」（箕浦，1999）の立場をとり、日常の保育の流れを妨げないよう心がけた。メモとビデオ録画は後に文字化し、この記録をもとに分析と考察を行った。

観察の場所は、幼児が自ら絵本とかわる行動を見るため、主に保育室内の絵本コーナーを見た（Figure 1参照）。しかし、幼児が室内にいない場合は、絵本と他の遊びやその他の活動とのつながりを知るために、屋外での遊びを観察した。また保育終了後、随時、担任保育者に、日常の幼児の様子や保育の意図、配慮などについてインタビューした。

#### 2.2.2. 家庭での絵本体験：質問紙調査

対象児の家庭での絵本体験、母親の絵本及び読書（読み聞かせ）に対する意識、母親自身の読書経験などについて問う質問紙調査を2003年7月中旬に実施した（ただし、本研究で取り上げるのは、対象児の家庭での絵本体験についてのみである）。質問紙は、調査者が研究目的を説明した後、直接母親に配布した。回収は、クラス担任に依頼した。配布数24の内、回収数は22であった（回収率91.7%）。

### 2.3. 分析

#### 2.3.1. 観察

幼稚園で幼児が絵本とかわる行動を以下の2点に着目して観察した。

①いつ絵本とかわるか 1日の保育時間の中で幼児が絵本とかわる時間帯を、前後の活動との流れを含めて検討した。

②どのように絵本とかわるか 幼児と絵本のかかわり方を調べた。

#### 2.3.2. 質問紙調査

家庭での絵本体験として、大人に絵本を読んでもらう「読み聞かせ」と、幼児がひとりで絵本をみる「ひとり読み」の2つの体験について問うた。加えて、入園後の家庭での絵本体験の変化について尋ねた。以下に、質問紙の項目を示す。

①読み聞かせ (a) 絵本の好意度（5択：とても好き～まったく好きではない）、(b) 頻度（5択：毎日～したことはある）、(c) 1日の実施時間（5択：5分未満～1時間以上）、(d) 開始時期（10択：胎児期～3歳以降）。

②ひとり読み (a) 頻度 (5 択: 毎日~まったく無い)、(b) 1日の実施時間 (5 択: 見ていない~1時間以上)、(c) 開始時期 (8 択: 6ヵ月~4歳)。

③入園後の変化 (a) 園で読んでもらった絵本についての会話 (2 択: ある、ない)、(b) 絵本をみる回数(量) (3 択: 増えた、変わらない、減った)、(c) 絵本の種類 (3 択: 増えた、変わった、変わらない)。(d) 幼稚園での絵本のかかわりに関する希望(自由記述)。

### 2. 3. 3. 観察と質問紙の関連

観察において幼稚園で絵本とかわる行動が多く見られた幼児とあまり見られなかった幼児を抽出し、質問紙の家庭での絵本体験(①「読み聞かせ」②「ひとり読み」)の結果と対応づけ、両者の関連を検討した。

## 3. 結果と考察

### 3. 1. 園で幼児が絵本とかわる行動: 観察の結果

#### 3. 1. 1. 対象クラスの絵本環境

幼児教育は、環境を通して行う教育である。そこで、幼児の絵本とのかかわりを見ていく前に、対象クラスの絵本環境と保育者のその設定のねらいについて見ていく。

①絵本環境 (a) 絵本コーナー: 対象クラスには、観察期間中、中庭に面した出入口の前に絵本コーナーが常設されていた(Figure 1参照)。入り口の正面に表紙が見えるように並べる本立てが置かれ、床にはカーペットが敷かれていた。カーペットの上には、楕円形の小型テーブルが置かれていた。

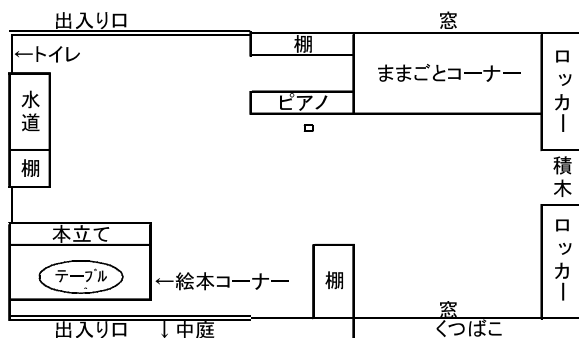


Figure 1 対象クラスの保育室の配置

(b) 本立ての中の絵本: 毎月、月初めに入れ替えられ、主に季節に応じた絵本(例: 7月は海にかかわるもの)が入れられていた。

②絵本環境に対する保育者の意図 インタビューで、絵本環境の設定意図を保育者に尋ねた。以下、その結果である。

(a) 絵本コーナー: 出入口に絵本コーナーがあることに関して、初めて家庭から離れて園生活を始める3歳児にとっては、保育室の入り口に入ることも、精

神的な負荷が高い。特に部屋の奥には入りにくい。そのため、入り口に、ほっと座れる空間を作ったとのことだった。身近に絵本があると子どもも安心できると考えての配置であった。

(b) 本立ての中の絵本: 入園当初は、保育者がクラスの幼児に読む(全員に対して読み聞かせする)絵本を本立てに入れていたということだった。それゆえ、保育者が読む本が増えると、本立てに入れる本も増える。また4月は、子どもたちの家庭にあるであろう絵本(例えば『ノントンシリーズ』、キノノ サチコ作・偕成社)を読むことが多いとのことだった。家で目にしたことがある絵本を園でも読むことで、家庭と園に連続性を持たせ、子どもが安心感を抱けるようにするためである。保育者が読んだ本は子どもが自分で読むことが多いため、読んだ本は本立てに入れておくとのことだった。月が変わると、その時子どもたちがよく見ている絵本は残しながら、季節にかかわる絵本を選んで、入れ替えるとのことだった。

③絵本環境の特徴: 観察園では、1年間をV期に分け、教育課程を編成している。1学期は2つの時期に分けられ、I期の4~5月は、園生活に慣れることが保育のねらいとされ、園に親しみがもてるように、家庭との連続性を重視した環境が構成される。II期の5~7月では、子どもが園生活に慣れ始める姿を受け、自分で好きな遊びを見つけることがねらいとされる。

観察期間における絵本環境も、この保育のねらいに対応していた。入園当初は、絵本コーナーは家庭との連続性を持たせた安らぎの場所として設定されており、絵本も家庭と同じものが置かれていた。5月以降になると、徐々に子どもの興味が広がるように、本立ての絵本も季節に応じたものに入れ替えられていた。

#### 3. 1. 2. いつ絵本とかわるか

①1日の保育の流れ 観察期間中の対象クラスの1日の保育の流れは、ほぼ以下の通りであった。8時45分頃から登園が始まる。登園すると、通園スモックを脱ぎ、タオルをタオルかけに掛けるなど、身支度を整える。その後、各自が好きな遊び(自由遊び)をする。日によって異なるが、10時半頃、あとかたづけをし、全員が集まって製作、絵画などの活動(一斉活動)を行う。11時頃からおやつを食べ、降園準備にとりかかる。準備の後、全員で集まり、保育者が絵本を読んだり、一緒に歌を歌う。最後に、保育者の話を聞く時間があり、11時半頃降園となる。

②絵本とかわる時間帯: Figure 2に結果を示した。ここでは、幼児がいつ絵本とかわるのか、その時間帯を大きく把握するため、各観察日のそれぞれの時間帯に、幼児が1人でも絵本と何らかのかかわりを見せれば、かかわりありとしてカウントした。なお、グラフの縦軸は主な活動を示す。活動間の空欄は活動と活動の移行時間を表し、グラフ中の数字は人数を示して

いる。

Figure 2にあるように、一斉活動やおやつ、降園前に全員が集まる時間（お帰り）など、幼児の活動内容が絵本以外のものに決められている時間帯は、絵本とかかわる事例はほとんど見られなかった。これらの活動は、ほぼ全員が集まって開始されることもあり、幼児が求められる活動以外の行動をとりにくいためと考えられる。また、自分で好きな遊びに取り組む自由遊びの時間帯においても、幼児が絵本とかかわる姿は観察日の1/4弱でしか見られなかった。3歳のこの時期、幼児が積極的な遊びとして、絵本とかかわることは多くはないことが指摘される。

一方、幼児が絵本とかかわることが多いのは、活動と活動の合間の時間帯であった。おやつを食べ、降園準備の身支度を整え、全員で集まるまでの時間は、観察日の全日において、絵本とかかわりが見られた。また一斉活動が終わり、おやつを待つまでの時間も、観察日のほぼ半数でかかわりが見られた。その他、登園後、身支度を整えて好きな遊びを始めるまでの時間や自由遊びから一斉活動への移行時間においても、絵本とかかわる幼児の姿が観察日の1/3強で見られた。

以上より、この時期、幼児が園で絵本とかかわるのは、活動と活動の合間の、言わばほっと一息つくような時間帯であることが明らかになった。

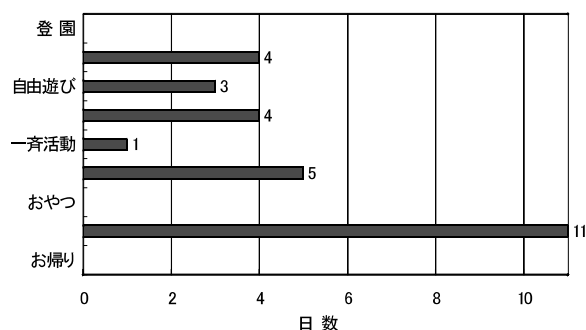


Figure 2 絵本とかかわる時間帯

### 3. 1. 3. どのように絵本とかかわるのか

観察の結果、Table 1に示すような種類の幼児と絵本のかかわりが見られた。

Figure 3は、Table 1のかかわり方の出現頻度をグラフに示したものである。観察対象の24人の幼児のうち、Table 1の項目ごとに、観察期間中1回でもそのかかわりが見られた幼児の人数を示した。

Table 2には、幼児別の結果を示した。なお、ここでの頻度は、同じ幼児が継続して同じ行動をとっている場合は、1回としてカウントしている。つまり、読む絵本の冊数や時間は問題としていない。例えば「1人で読む」は、絵本を1人で読み始めてから、絵本を何冊見ても、絵本を見るという行為を止めるまでは1回として数えている。これは、本研究では、幼児がそ

Table 1 3歳児の園での絵本とのかかわり方

行動	内容
1人で読む	1人で絵本を手にして、ページを広げ、絵本を見る。
友だちと読む	友だちと一緒に1冊の絵本を広げて、並んで見る。
絵本を読む友だちを見る	絵本を読んでいる友だちを、少し離れた場所から見る。
遊びの道具にする	絵本のページを広げて見たり、読んだりすることなく、他の遊びの中に持ち込む。(例)ベビーカーの中に絵本を入れて運ぶ。
絵本を手に取る	本立てから絵本を取り出すが、ページを開いて見ることまではしない。
本立てを見る	立ち止まって本立てを見るが、絵本にふれることはない。

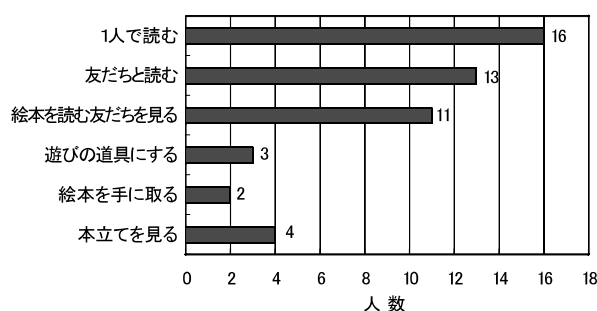


Figure 3 絵本とのかかわり方

の行動に従事する時間量よりも、幼児が絵本とかかわる行動のバリエーションをまず取り出し、その出現率を明らかにすることを目的としたためである。

これらの結果を見ると、まず幼児と絵本のかかわり方は、単に「1人で、絵本を手にしてページを広げ、絵本を見る」といった行動だけではないことが分かる。確かにFigure 3を見ると「絵本を1人で読む」という行動が最も多く、24人中16人と全体の6割以上の幼児に見られた。しかし、自分は絵本を見ていないが、絵本を見ている「友だちを少し離れた場所から見る」というように、間接的に絵本とかかわる幼児も全体の半数近い11人いた。それだけではなく、本立ての絵本に手を触れながらも、ページを開いて中を見るところまでには至らない「本を手に取る」や、「本立ての本を立ち止まって見る」といった行動も見られた。「遊びの道具」として用いる場合も観察された。このように幼児が絵本とかかわる行動は、我々が想定する「内容をみる」といった「かかわり方」の枠を越え、多様であることが分かる。

また、「友だちと一緒に見る」「絵本を見ている友だちを見る」のいずれかのかかわりが見られた幼児は、のべ19人いた。全体の8割近い人数である。「幼稚園教育要領」では、絵本を介して「友だち」と心を通わせることがねらいとして挙げられていた。しかし逆に「友だち」が、園で幼児と絵本をつなぐ橋渡しとなっ

ていることも、1つの特徴として指摘できる。

### 3. 2. 家庭での絵本体験：質問紙調査の結果

ここでは、質問紙の全体的な結果を示し、対象クラスの幼児全体の家庭での絵本体験の特徴を考察する。

#### 3. 2. 1. 読み聞かせ

①絵本の好意度 「とても好き」が13人（54.2%、クラスの人数24を100として算出）、「好き」が9人（37.5%）であった。全体的に好意度が高いことが分かる。

②頻度 Figure 4（グラフ中の数字は人数を示す）に結果を示した。最も多いのは「週に2、3回」（33.3%）であり、次いで「毎日」（29.2%）であった（未記入2人、8.3%）。「毎日」「ほぼ毎日」の頻度の高い家庭（10人、41.7%）と「週2、3回」以下の頻度の低い家庭（10人、41.7%）にはほぼ2分されることが分かる。

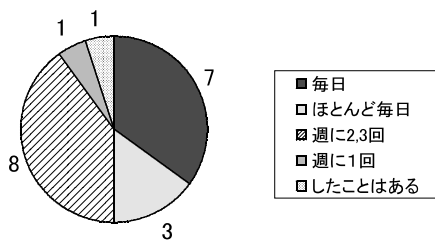


Figure 4 読み聞かせの頻度

③1日の実施時間 Figure 5が結果である。「5-15分」が過半数を占めている。これは、絵本を1、2冊読む時間である。

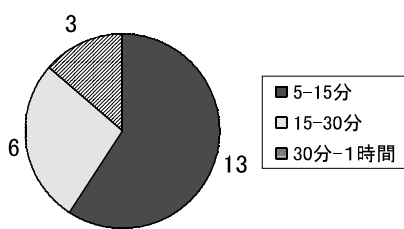


Figure 5 読み聞かせの1日の実施時間

④開始時期 結果をFigure 6にまとめた。「1歳-1歳半」（29.2%）が最も多く、「5、6ヵ月」「7ヵ月-1歳」（各16.7%）が続いている。1歳までに4割強、1歳半までに8割強が含まれる。入園前に、幼児期早期から読み聞かせを体験している幼児が大半であることが分かる。

ここまでの結果から、対象児の読み聞かせ体験の特徴は、以下のようにまとめられる。幼児期早期から読み聞かせを体験し、好意度は全般的に高い。頻度はほ

ぼ高低2群に分けられ、1日に読む絵本は1、2冊程度である。

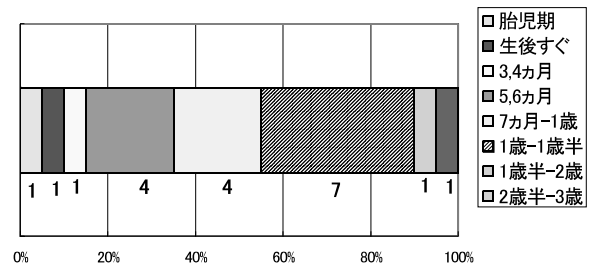


Figure 6 読み聞かせの開始時期

#### 3. 2. 2. ひとり読み

①頻度 Figure 7に結果をまとめた。人数にばらつきが見られることが分かる。

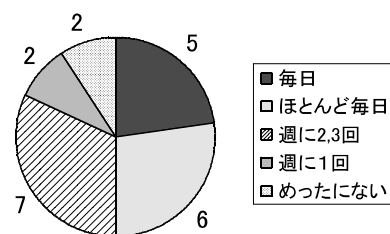


Figure 7 ひとり読みの頻度

②1日の実施時間 結果をFigure 8に示した。「10-15分」が半数を占め、次に「5分」（20.8%）が続いた。15分以内に全体の3/4が含まれる。しかし、「見ていない」「1時間以上」も1人（4.2%）ずつおり、頻度同様、個人間のばらつきが大きい。

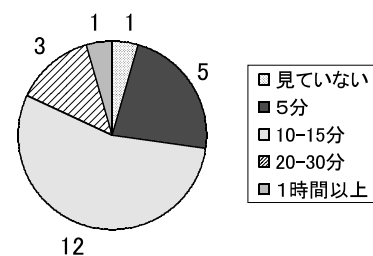


Figure 8 ひとり読みの1日の実施時間

③開始時期 Figure 9が結果である。これを見ると、「3歳」と「3歳半」を併せた3歳代、「2歳」と「2歳半」を併せた2歳代からがそれぞれ9人（37.5%）であることが分かる。このことから、ひとり読みは入園の1年ほど前から見られることが多いといえる。

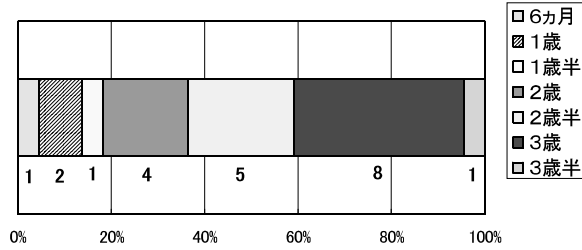


Figure 9 ひとり読みの開始時期

以上の結果より、対象児のひとり読みの特徴として、家庭では入園前1年前後から見られることが多く、入園後は、頻度、時間とも個人によるばらつきが大きい点が指摘される。

### 3. 2. 3. 入園後の変化

①会話 「園で読んでもらった絵本のお話を子どもが家庭でする」が15人（62.5%）、「しない」が7人（29.2%）だった。全体の2/3弱の子どもが、絵本に関する園での生活の様子を家庭で母親に伝えていることが分かる。

②回数 「増加」が15人（62.5%）、「変化なし」が4人（16.7%）、「減少」が3人（12.5%）だった。全体の2/3弱の家庭で、入園後、絵本と接する量が増加していた。その一方で、通園することによって絵本と

接する時間が減少している家庭もあった。通園によって在宅時間が減少することもあるが、「子どもが疲れて寝てしまうため、時間がとれない」といった理由も自由記述の中に見られた。

③種類 「増加」が15人（62.5%）、「変化した」が6人（25.0%）、「変化なし」が1人（4.2%）だった。種類が増えたり、変わったりした家庭が大半である。入園によって幼児の絵本体験の幅が広がっていることが分かる。

④園への要望 記述が見られたのは11人（45.8%）だった。その中で最も多い要望は、多様な絵本の読み聞かせ（記述例：「家庭では子どもの好む本を読むので、幼稚園ではいろいろな種類の絵本を読んでもらって、子どもの興味・関心を拡げて欲しい」4人、16.7%）だった。

以上、入園後、幼児が絵本を読んでもらう時間や種類が増えたり、園での絵本体験について子どもが話す家庭が多いことが明らかになった。入園によって、幼児と絵本のふれあいが、量、幅ともに広がっていることが指摘される。また母親の方も、幼稚園での絵本とのかかわりについて、種類（幅）の広がりを求めていることが分かった。

### 3. 3. 観察と質問紙調査の結果の関連

#### 3. 3. 1. 園で絵本とかわる頻度が高い幼児

Table 2 に、幼児ごとに観察と質問紙調査の結果を

Table 2 幼稚園での絵本とのかかわりと家庭での絵本体験

No.	名前	性別	観 察							質 問 紙								
			欠席	合計	1人で読む	友達と読む	読む友を見る	遊びの道具	本を手取る	本棚を見る	読み聞かせ				ひとり読み			
											好意度	頻度	時間	開始時期	頻度	時間	開始時期	
1	A	男	1	14	8	2	2			2		5	5	4	2歳半-3歳	5	4	3歳
2	B	男		14	7	3	1	2		1		5	5	2	胎児期	5	3	2歳半
3	C	女		12	10	2						5	5	3	5.6か月	4	3	2歳半
4	D	男		11	7	1				1	2	4	3	2	7か月-1歳	4	3	2歳
5	E	男	3	8	7	1						4	1	2	1-1歳半	3	3	2歳
6	F	女		7	5	1				1		4	3	3	5.6か月	1	2	2歳半
7	G	女		6	5			1				5	5	3	1-1歳半	5	4	2歳半
8	H	女		4	3	1						5	4	2	1-1歳半	4	3	3歳
9	I	男		4	3		1					4	3	2	7か月-1歳	3	2	3歳
10	J	男		4	1	1	1			1		4	3	4	2歳半-3歳	3	3	3歳
11	K	女		3	2	1						4	3	2	1-1歳半	4	3	3歳
12	L	男		3	2		1					5	1	2	7か月-1歳	5	5	3歳
13	M	男		3	2		1					5	4	3	生後すぐ	3	2	1歳
14	N	男		3	1	1	1					4	?	4	2-2歳半	2	3	2歳
15	O	女	1	3		1	2					5	5	3	1歳半-2歳	4	2	3歳
16	P	男		3			3					5	3	2	1-1歳半	5	3	3歳
17	Q	女		2	2							5	5	2	7か月-1歳	3	2	6か月
18	R	女		2	2													
19	S	男		2		1	1					5	5	2	5.6か月	2	3	3歳半
20	U	女		1		1						4	3	2	5.6か月	1	1	1歳
21	V	男		1			1											
22	W	女	1	1			1					5	4	2	1-1歳半	4	3	2歳半
23	X	女		0								5	4	3	1-1歳半	3	3	2歳
24	Y	女		0								4	3	2	3.4か月	4	4	1歳半

注：質問紙の数値は、以下の評定を表す。なお、質問紙欄の塗りつぶしは、最高値への評定を示す。  
 「読み聞かせ」[好意度]：5「とても好き」、4「好き」。  
 「頻度」：5「毎日」、4「ほとんど毎日」、3「週に2、3回」、2「週に1回」、1「したことはない」。  
 「時間」：4「30分-1時間」、3「15-30分」、2「5-15分」。  
 「ひとり読み」[頻度]：5「毎日」、4「ほとんど毎日」、3「週に2、3回」、2「週に1回」、1「めったにない」。  
 「時間」：5「1時間以上」、4「20-30分」、3「10-15分」、2「5分」、1「見ていない」。  
 18（R児）、21（V児）の空欄は、質問紙未回収のためである。

示した。園での絵本とのかかわりの多い幼児から順に示している。Table 2を見ると、頻度が高い上位7人の家庭での絵本体験は2分されることが分かる。上位3人(A、B、C)と7位(G)の計4人は、絵本への好意度も「とても好き」と高く、読み聞かせ・ひとり読みの頻度も「毎日」が大半を占める。特に絵本が好きで、家庭でも絵本と関わる頻度が高い幼児といえる。

一方、4～6位の3人(D、E、F)は、好意度が「好き」とやや低い。クラスの半数以上が「とても好き」と評定していることを考えれば、低い方に属する。また、読み聞かせ・ひとり読みの頻度も決して高くはない。家庭での絵本体験が少ない幼児といえるだろう。この結果から、園の絵本環境は、家庭で絵本と接する機会があまりない幼児に対して、全員とはいえないまでも、その一部の幼児に対して、絵本と出会う契機を提供するものであることが明らかになった。

また、Table 2で上位7人の幼児と絵本のかかわり方を見ると、かかわりの中でも「1人で読む」割合が高いこと、他の幼児よりも「読んでいる友だちを見る」行動が少ないことが分かる。一方、他の幼児は「読んでいる友だちを見る」ことが多く、「絵本を手取る」「本立てを見る」といった行動はほとんど見られない。すなわち、上位の幼児は、絵本のページを開くか否かは別として、絵本自体に興味・関心が向かったかかわりが多いことが指摘される。一方、他の幼児たちは「友だち」の存在を介して絵本に注意を向けるかかわりが多いといえよう。園での絵本とのかかわりを規定するのは、家庭での絵本体験とは別に、園における絵本自体への興味・関心の強さなのかも知れない。

### 3. 3. 2. 園で絵本とのかかわる頻度の低い幼児

Table 2を見ると、園で絵本とのかかわる頻度の低い幼児の内、Q、Sの2名は、絵本の好意度も「とても好き」と高く、読み聞かせの頻度も「毎日」と高い。ただし、ひとり読みの頻度は低い。読んでもらうのは好きだが、自分で読むことは少ない幼児といえる。

全体の質問紙調査の結果では、ひとり読みの頻度と時間は、個人によるばらつきが大きかった。本研究では、園での絵本とのかかわりを、幼児が自ら絵本とのかかわる行動を指標としている。家庭での絵本体験の内、こうした園でのかかわり行動を予測するのは、家庭においても幼児自らが絵本を手にするひとり読みの頻度といえるのかも知れない。すなわち、読んでもらうことが好きなだけでなく、家庭においても自分で絵本を見るのが好きで、その習慣のある子どもが、園においても自分から絵本とのかかわるのかも知れない。

園で絵本とのかかわる頻度の低い幼児の中には、Uのように、好意度もやや低く、絵本と接する頻度の低い、家庭での絵本体験が少ない幼児もいた。家庭での経験の少なさが、そのまま園の絵本経験に反映している幼児といえる。またYは、園に慣れることができず、た

えず保育者と一緒に行動していた幼児であった。保育者から離れて、絵本とのかかわることは見られなかった幼児である。対象クラスでは、家庭との連続性を意識して絵本環境が設置されていた。しかし、全ての幼児に対して、絵本が園の生活に親しみを持つものとして有効に作用しているのではなかった。絵本は万能薬ではない。1人ひとりの子どもに応じて、絵本とは異なる対応をとっていく必要がある。

## 4. 総合的考察

以上の結果をもとに、ここでは、本研究で明らかになった3歳児の1学期の絵本とのかかわりの実態をまとめていく。その上で、保育における絵本の意義を考えていくための今後の展開について述べる。

### 4. 1. 3歳児1学期の園での絵本とのかかわり

#### 4. 1. 1. 活動の合間に絵本とのかかわる

幼児が保育の場で絵本とのかかわる時間帯を見ると、活動と活動の合間の時間帯が多かった。1つの活動が終わり、ほっと一呼吸おくような時間帯といえよう。この結果は、保育者の絵本環境の設定意図と対応する。本研究では、3歳児1学期の保育者の絵本環境の構成のねらいは、主に幼児に安心感を与えることにあった。そのねらいが達成される時間帯に、実際に幼児が絵本とのかかわっていたといえる。「幼稚園教育要領」には指摘のない、「安らぎを与えるものとしての絵本」という機能が、新たに見出された。

#### 4. 1. 2. 多様なかかわり方で絵本にふれる

幼児が絵本とのかかわる、そのかかわり方には、「絵本を手に取り、ページを開き、内容を見る」といったかかわり方だけでなく、多様なかかわりがみられた。

まず、数は少ないものの「手を取るだけ」「遊びの道具」といったかかわりが見られた。絵本という「物」を手に取り、触れはするが、その「物語世界」を開くまでには至らないかかわり方である。身体的・物理的な接触はあっても、内容との知的な接触はないかかわり方とも言える。さらに「見るだけ」というかかわりも見られた。身体の向きや視線は、絵本に向けられていても、身体的・物理的にも絵本との接触のないかかわり方である。ただし、このようなかかわりであっても、幼児の注意・意識は、絵本に向かっていることは、忘れてはならないだろう。

また、「友だちと一緒に読む」「絵本を読んでいる友だちを見る」といった「友だち」を介したかかわりも見られた。絵本は、園の友だちによって、幼児に開かれた存在となる。

これらの幼児の絵本とのかかわりは、絵本への新たな興味・関心の芽生えとも捉えられる。なぜなら、内容を見ないかかわり方も、絵本自体に向けられた興味・関心

の反映と考えられるからである。「絵本」を見たり、手に取ったりするのは、とにかく「絵本」が気になっているからであろう。また、「友だち」を介した絵本とのかかわりは、絵本だけでは絵本に興味がない幼児に、「友だち」の存在が橋渡しとなり、絵本に注意が向かうかかわりといえる。

このように、多様な絵本とのかかわり方は、幼児の芽ばえた絵本への興味を反映する。また、そのように保育者が捉えることで、幼児の絵本とのかかわりがはぐくまれていくのではなからうか。絵本に触れたり、ただ離れて見るだけの幼児も、友だちが絵本を読んでいるのを見ているだけの幼児も、今、絵本の世界の扉の前に立っている。幼児と共に、扉を開く働きかけが、保育者に期待される。

#### 4. 2. 3歳児の家庭での絵本体験

母親に対する質問紙調査の結果から、対象児の絵本体験の特徴として、絵本に対する好意度は全体的に高いが、読み聞かせの頻度は「毎日」「ほぼ毎日」と頻度の高い家庭と「週2、3回」以下の家庭に2分されること、1回の読み聞かせ時間は絵本を1、2冊読む時間である「5-15分」が過半数を占めることが明らかになった。また、1歳半までに8割以上が読み聞かせを始めており、幼児期早期から家庭での読み聞かせを体験して、幼稚園に入園してくる幼児が大半であることが示された。

一方、ひとり読みは、頻度、1日の実施時間とも個人間のばらつきが大きかった。絵本を読んでもらうことは大半の幼児が好きだが、自分で読むことに関しては、好きでたくさん読む子もいれば、そうでない子もいることが本研究によって明らかになった。もっとも、ひとり読みに関しては、文字の習得状況などの子どもの認知的な発達、家庭の絵本量といった物理的環境、親が本を読むかといった読書モデルの有無などの社会的環境など、その行動を生む要因がいくつか考えられる。今後は、この点を含み込んだ検討が必要と考える。

#### 4. 3. 園での絵本とのかかわりと家庭での絵本体験

幼稚園での絵本とのかかわりと家庭における絵本体験の関連をみると、園でのかかわりの頻度が高い幼児の中には、読んでもらうことも自分で読むことも大好きで、家庭でも絵本とよく接している幼児と、逆に家庭ではあまり絵本とのかかわっていない幼児がいた。この結果から、園の絵本環境が、家庭での絵本体験が少ない幼児の全員ではないにしろ、その一部に、絵本と接する機会を提供していることが明らかになった。ここに保育現場における絵本の意義が指摘できる。

また、園での絵本とのかかわりが多い幼児は、友だちを介した絵本とのかかわりよりも、自分自身が絵本とのかかわる「1人で読む」行動が多く見られた。「絵

本」に対する興味の芽生えが、その背景に伺えた。

質問紙調査の結果から、母親が幼稚園での絵本とのかかわりとして求めるものの1つに、家庭では体験できない多様な絵本とのかかわりが挙げられていた。家庭での体験を補い、発展させていくような絵本との出会いとかがわりの、保育の場において求められている。

### 4. 4. 今後の展開

#### 4. 4. 1. 幼稚園における絵本の意義

以上の結果と考察から、「安らぎを与える」「絵本への興味の芽生えを育てる」「家庭での絵本体験を補う」といった点が、保育における絵本の意義として、新たに浮かび上がってきた。しかし、これらの意義を検証するためには、以下のような観点を加味した今後の研究が必要である。

#### 4. 4. 2. 発達に伴う変化を追う

本研究は幼稚園3歳新入園児の1学期を対象にした。しかし、幼児は日々発達・成長し、その発達につれ、保育のねらいも変わる。幼児と絵本とのかかわり方も変化し、上記の保育における絵本の意義も変わっていくことが想定される。本研究の結果を踏まえ、今後、縦断的に追っていく研究が必要である。就学前までの幼児の育ちを追うことによって、保育の場における絵本の意義の全体像が明らかになると考える。

#### 4. 4. 3. 絵本を読んでもらう経験の意義を問う

本研究では、幼児と絵本とのかかわりに関して、幼児自らが絵本とのかかわる行動に焦点を当てた。しかし、絵本が「大好きな」幼児が必ずしも保育の場で絵本と接しているのではなかった。「読んでもらうことが好き」と考えられる幼児もいた。

また、「絵本」自体への興味を喚起したり、「友だち」を介して絵本に注意を向け始めた幼児に、より「絵本」の存在を示していくためには、「保育者が子どもたちに絵本を読む」活動が不可欠と考える。本来、絵本は、読んでもらうためにある（松居，2003）。幼児と絵本世界をつなぐためには、大人の存在が不可欠なのである。実際、保育現場では、日常的に保育者による絵本の読み聞かせが行われている。それゆえ、今後は、幼児が自ら絵本とのかかわる行動に加えて、保育者に読んでもらう活動を併せた総合的な保育現場における幼児の絵本体験を取り上げていく必要がある。

#### 4. 4. 4. 1人ひとりの子どもにとっての絵本の意義を問う

絵本ブームといわれる今、絵本の効用が高らかに謳われている。その中で、「読み聞かせは乳幼児期に不可欠、とにかく読まなくては」という焦燥感や「絵本を読んでおけば、とりあえず大丈夫そう」といった漠とした安心感が広がっているように思う。1人の絵本研究として、そうした風潮に危惧を感じる。

本研究の結果からも明らかのように、全ての幼児に、



絵本が安らぎになったり、興味が湧くものになるとは限らない。いわゆる「絵本の力」が万人に有効なわけではない。絵本は万能薬ではないのだ。一律に処方すれば、すなわち子どもに絵本を強制するようなことがあれば、害になることもあり得る。

では、「絵本の力」を有効に生かすためには、何が必要なのだろうか。それは、1人ひとりの子どもに、丁寧に絵本との出会いの場を提供していくことだと考える。処方の仕方を考えるのである。本研究の結果にもあるように、ひとり読みに関しては個人差が大きかった。絵本とのかかわりも、直接絵本に向かう幼児もいれば、友だちの媒介を要する幼児もいた。絵本をめぐる幼児の興味や体験は様々なのである。一方「絵本の力」も、「幼稚園教育要領」のいう「心のふれあい」や「想像力や言葉をはぐくむ」、本研究で指摘した「安らぎを与える」など、多様である。

それゆえ、今、この子どもにとって何が必要なのか、1人ひとりの子どもを把握した上で、どのような絵本と、いかに出会わせるのかを考えていく必要がある。保育者が読むのがよいのか、友だちの力を借りるのか、あるいは絵本以外の働きかけが有効な場合もあるだろう。絵本も保育環境の1つにすぎないのだから。

子どもへの理解を深め、同時に絵本の意義について研究を進めていく。それによって、1人ひとりの子どもの、それぞれの時期に適った絵本とのかかわりのあり方を考え、提供していく。これが、「絵本の力」を最大限に引き出すことにつながると考える。

### 引用文献

- 秋田喜代美 2004 子どもの発達と絵本 発達, 99, 2-7.
- 秋田喜代美・横山真貴子・森田祥子・菅井洋子 2004 ブックスタート杉並区パイロットスタディ報告書 NPOブックスタート
- Fletcher, K.L. & Resse, E. 2005 Picture book reading with young children: A conceptual framework. *Developmental Review*, 25, 64-103.
- 井上実枝子・名倉三枝・渥美和子 2004 幼稚園における子どもの絵本との関わり 発達, 99, 23-26.
- 松居 直 2003 絵本のよろこび 日本放送出版協会
- 文部省 1998 幼稚園教育要領 大蔵省印刷局
- 寺田清美 2004 乳幼児の心を育む絵本との関わり 発達, 99, 18-22.
- 横山真貴子 2004a 絵本の読み聞かせと手紙を書く活動の研究：保育における文字を媒介とした活動 風間書房
- 横山真貴子 2004b 幼児期における家庭での読み聞かせ 発達, 99, 27-30.
- 横山真貴子・秋田喜代美 2002 ブックスタートプロ

ジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識 (2) : 4ヵ月時での親の読み聞かせに関する考えと行動 日本保育学会第55回大会発表論文集, 166-167.

全国出版協会・出版科学研究所 2005 出版指標年報

### 注

- (1) ブックスタートは、1992年イギリスで最も他民族の人たちが住むバーミンガム市において、読み書き能力の育成という就学準備教育の目的をもって始まった運動である。日本には2000年の「子ども読書年」に「子ども読書年推進会議」によって紹介され、2001年4月に本格的に実施が開始された。導入の際、日本ではイギリスとは異なり、子育て支援の活動として行うことが確認され、「赤ちゃんとは絵本を通して楽しいひとときを共有すること (Share books with your baby)」が理念として掲げられている。
- (2) 現行の「幼稚園教育要領」における絵本に関する記述は、「言葉」の領域の以下の3箇所である。「1ねらい」の「(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、「絵本や物語などに親しみ、先生や友だちと心を通わせる。」、「2内容」の「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。」、「3内容の取り扱い」の「(2) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりする楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」(傍点は筆者による)。

### 付記

- (1) 研究にご協力いただきました奈良教育大学附属幼稚園の上野由利子先生はじめ教職員の皆様、園児及び保護者の方々に心よりお礼申し上げます。
- (2) 本研究の実施においては、平成15～17年度科学研究費補助金(若手研究(B))(課題番号15730298)の補助を受けた。